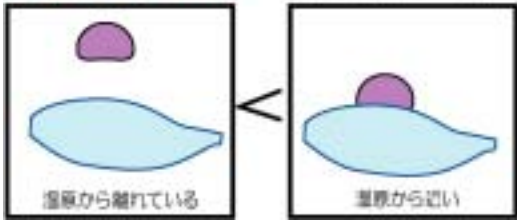


達古武地域における森林再生 ベースマップの作成と保全・再生優先度の検討 (7/10)
5 - 2 . 保全・再生優先対象地の抽出 - 湿原周辺の非自然林 -

■ 考え方

- 湿原生態系の維持・向上の視点から自然林再生を行なう優先度の高い場所を抽出した
- 湿原生態系の質を低下させているものとして、「非自然林」= 人工林・二次草地・小サイズ疎林を抽出し、そのなかで湿原からの距離が近いものをさらに選出した。

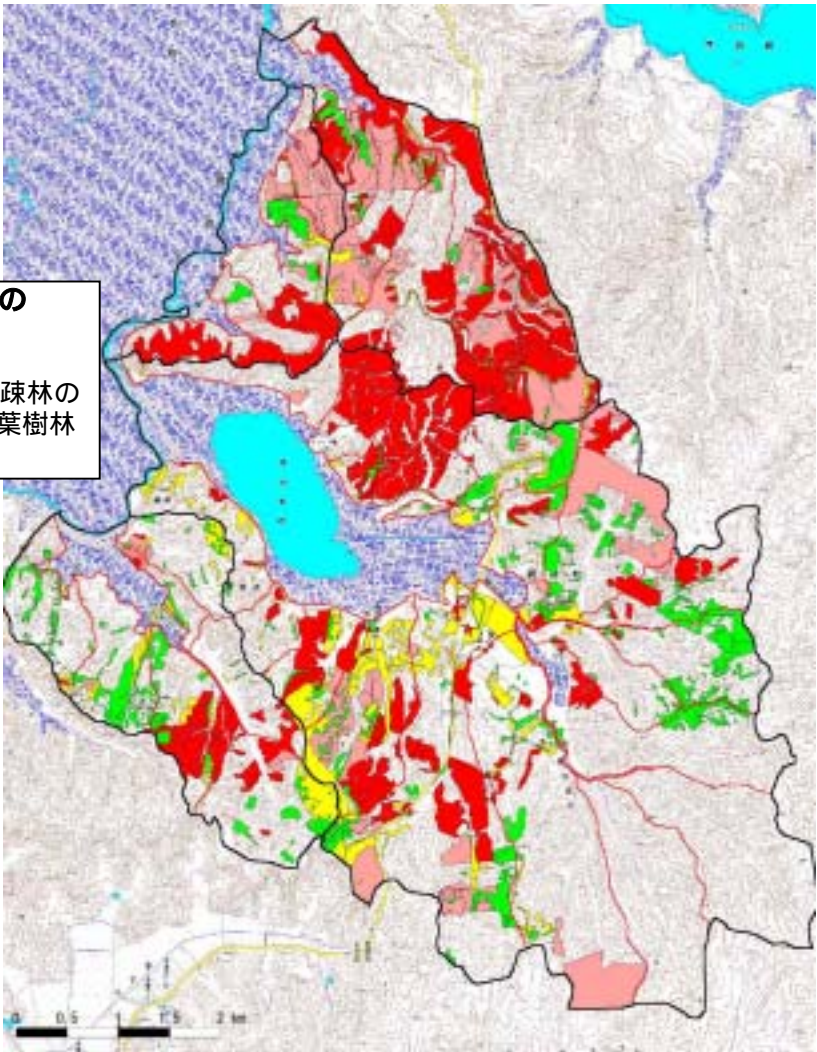
非自然林地の分布パターン…湿原に近い場所ほど生態系への影響は大きい



非自然林に含むもの

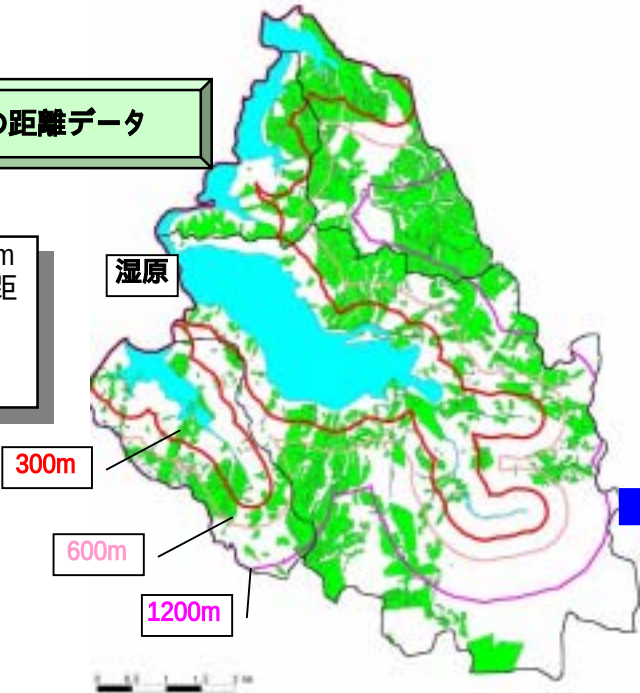
- 人工林
- 小サイズかつ疎林の
落葉広葉樹林
- 二次草地

● 「非自然林」の分布



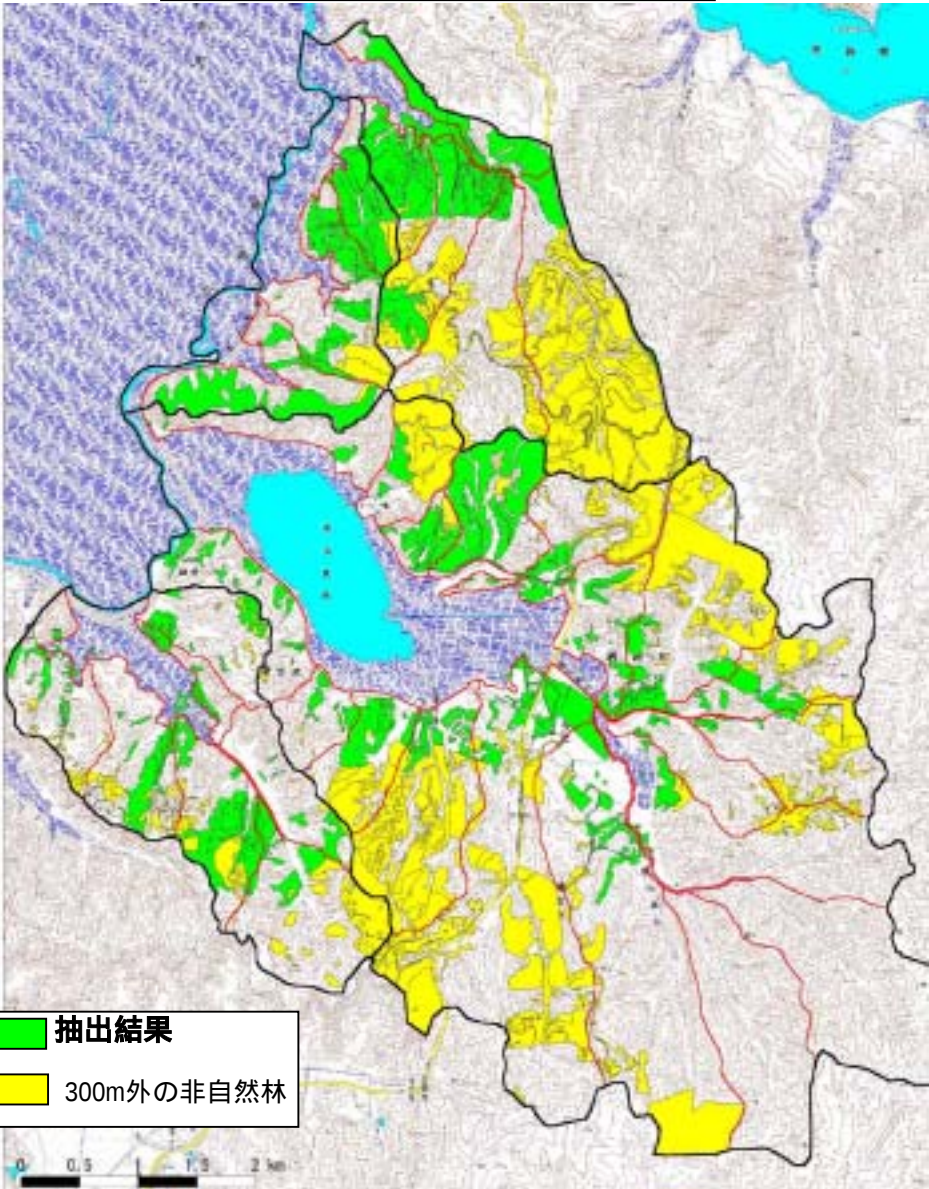
● 湿原からの距離データ

- ここでは300m (赤線)を抽出距離として採用。



条件フィルタ
湿原から300m以内に
一部がかかるもの

● 湿原周辺の非自然林



■ 結果

- 全域の13.1%、550haが抽出された。
- 達古武沼北部のカラマツ林・トドマツ林がもっとも広範囲である。
- 達古武川の湿原流入口周辺の二次草地・未利用農地も抽出された。

植生タイプ	全域		湿原300m以内	
	面積 ha	割合%	面積 ha	割合%
二次草地	181	4.3%	92	2.2%
落葉広葉樹林・小サイズ疎林	270	6.4%	87	2.1%
人工林	888	21.1%	371	8.8%
合計	1339	31.9%	550	13.1%

■ 今後の課題

- 今回用いた湿原からの距離(300m)は仮設定の値で、対象範囲の大きさを勘案して抽出しやすい範囲として設定した。また、各植生が湿原生態系においてどのような位置を占めているのかは、生態的な指標を用いて判断する必要がある。今後、生物生息状況等のモニタリングデータをもとに、生態学的な検討を加え、検証していく必要がある。
- 今回は地形条件と植生区分のみを用いたもので、社会条件(土地所有状況・利用状況等)は考慮していない。今後、社会条件による実施可能性の面からの分析も加え、自然林再生(草地・疎林での自然林再生、人工林から自然林への樹種転換)の対象地を検討していく必要がある。

- 抽出結果
- 300m外の非自然林